

〔日本書紀二十六〕五年七月戊寅遣小錦下坂合部連石布大仙下津守連吉祥使於唐國中略伊吉連

略以己未年七月三日發自難波三津之浦

〔日本書紀通證三十一〕難波三津續紀攝津國御津村萬葉集云安之我知流難波美津爾大船爾又云大伴乃御津乃濱松屬西成郡

〔書紀集解二十六〕攝津志曰西成郡三津神祠在島內三津寺町

〔萬葉集三〕柿本朝臣人麻呂羈旅歌

三津埼浪矣恐隱江乃舟公宣奴島爾ミツノサキナミヲカシコモリエノフネノキミガカサシマニ

〔萬葉集略解三上〕舟公宣奴島爾の六字今の訓よしなし字の誤れるならん試にいはいはぶ舟令寄

敏馬崎爾なども有けんさらばふねはよせなんみぬめのさきにと訓べし宣長は舟八毛何時

寄奴島爾と有けん八毛を公一字に誤何時を脱し寄を宣に誤れるならんとてふねはもいつ

かよせんぬじまにと訓りいづれにても有べし

〔萬葉集三〕角麻呂歌

鹽干乃三津之海女乃久具都持玉藻將苅率行見シホヒトミツノウメノクツキタマモカサシイサキヤミ

〔伊勢物語下〕むかしをとこ津のくにゑるところありけるにあに弟友だちけさこそ難波のか

たに往きけりなぎさを見れば船どものあるを見て

なにはづをけふこそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたるふねこれをあはれがりて

人々かへりにけり〇又見後撰和歌集

〔古今和歌集十三〕題まらず

君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいひな逢ひきともいはじ

〔顯註密勘五〕みつとなひそとはなにはにみつといふ所のあればなにはなるみつに人をみ

つとそへたり

讀人まらず